

第115回歴博フォーラム

いにしへの「玉手箱」、 近世好古図録をひらく

2023年4月1日(土) 13:00~16:30

会場 国立歴史民俗博物館 講堂



第115回歴博フォーラム

いにしへの「玉手箱」、 近世好古図録をひらく

日時： 2023年4月1日(土) 13:00～16:30

会場： 国立歴史民俗博物館 講堂

主催： 国立歴史民俗博物館

プログラム

- 13:00 開会の挨拶
西谷 大 (国立歴史民俗博物館・館長)
- 13:10 趣旨説明
三上 喜孝 (国立歴史民俗博物館・教授)
- 13:25 「弥生時代石剣の集古帖への記載」
吉田 広 (愛媛大学ミュージアム・教授)
- 13:50 「集古帖の瓦帖が語る藤貞幹の古瓦譜編集過程」
村野 正景 (京都府京都文化博物館・学芸員)
- 14:15 「近世好古図録に描かれた寺社宝物」
清水 健 (東京国立博物館・主任研究員)
- 14:40 休憩
- 14:55 「網代輿を「作る」視点で考える」
落合 里麻 (東北生活文化大学美術学部・講師)
- 15:20 「『集古十種』編纂をめぐる吉田道可と松平定信の交流」
加藤 明恵 (神戸大学大学院人文学研究科・特命助教)
- 15:45 「『聆涛閣集古帖』と「本山コレクション」」
山下 大輔 (関西大学博物館・学芸員)
- 16:10 全体を通しての質疑応答
- 16:25 閉会の挨拶
三上 喜孝 (国立歴史民俗博物館・教授)

第115回歴博フォーラム

「いにしへの「玉手箱」、近世好古図録をひらく」

開催にあたって

三上 喜孝（国立歴史民俗博物館）

この歴博フォーラム「いにしへの『玉手箱』、近世好古図録をひらく」は、企画展示「いにしえが、好きっ！—近世好古図録の文化誌—」（2023年3月7日～5月7日）の関連事業として開催するものです。この展示は、国立歴史民俗博物館の共同研究「『聆涛閣集古帖』の総合資料学的研究」（研究代表者：藤原重雄、2017～19年度）の研究成果発表のひとつでもあります。

この企画展示の主人公である『聆涛閣集古帖』は、摂津国菟原郡住吉村呉田（現在の兵庫県神戸市東灘区住吉）の江戸時代の豪商・吉田家により編纂された古器物の一大模写図録です。豊かな財力を背景に、当時の学者や貴族たちとの交流を通じ、三代にわたって多くの古文書や古物を収集して、この『聆涛閣集古帖』は編集されました。

『聆涛閣集古帖』は、さまざまな古い器物を「天地・尺量・升量・扁額・文房・肖像・書・碑銘・墓誌・鐘銘・雑銘・甲冑軍営・弓矢・刀剣・鋒・馬具・楽器・印章・鏡・織紋・乗輿・玉・食器・食品・葬具・調度・囊匣・瓦・鈴鐸・戯器・仏具・雑」の32のジャンルに分類し、約2,400件の古器物図を収録しています。さながら「いにしへの玉手箱」です。写された対象は、人間の過去の痕跡、すなわち歴史に関する広い領域に及んでいます。近代的な博物館が生まれる前の、歴史に対するまなざしを知ることのできる、またとない資料なのです。

この企画展示の前身となる3年間の共同研究では、『聆涛閣集古帖』のもつ情報量の多さに圧倒されつつも、さまざまな学問分野の一線で活躍する共同研究員により、新たな知見と知的刺激を得ることができました。その後、実際に企画展示を準備する段階でも、さらに多くの新発見が相次ぎました。この企画展示は、その新知見をできるだけ詰め込んだ、盛りだくさんの内容になっています。これは、さまざまな学問ジャンルの人が力を合わせなければ実現できなかったことです。「集合知」の言葉の意味を、これほど実感したことはありません。

ただその分、本企画展示の情報量は、それこそ「玉手箱」のように底知れぬものになっています。ひとつひとつの展示資料に「物語」があり、しかもそれらは複雑な道筋をたどりながら今に伝えられてきました。そのすべてを理解するのは難しいかもしれません。そこで、このフォーラムでは、この企画展示の背後にあるさまざまな物語、展示だけでは十分に語れなかったこと、さらには展示の裏話などを、各学問分野の一線で活躍する展示プロジェクト委員や展示協力者に解き明かしてもらいます。このフォーラムを通じて、『聆涛閣集古帖』の豊かな世界を実感することができるでしょう。そしてそれにより、参加された方々が、企画展示の内容をさらに深く理解され、よりいっそう楽しめるようになることを、願ってやみません。

それでは、「いにしへの玉手箱」をひらくことにいたしましょう。

登壇者の紹介

み かみ よしたか
三上 喜孝

国立歴史民俗博物館・教授

- ・『落書きに歴史をよむ』（吉川弘文館／2014年）
- ・『日本古代の文字と地方社会』（吉川弘文館／2013年）
- ・『日本古代の貨幣と社会』（吉川弘文館／2005年）

よしだ ひろし
吉田 広

愛媛大学ミュージアム・教授

- ・『荒神谷遺跡青銅器群の研究』（共著）（島根県教育委員会／2022年）
- ・『松帆銅鐸調査報告書Ⅱ』（共著）（南あわじ市教育委員会／2021年）
- ・「弥生青銅器祭祀の展開と特質」『国立歴史民俗博物館研究報告』第185集（国立歴史民俗博物館／2014年）

むらの まさかげ
村野 正景

京都府京都文化博物館・学芸員

- ・「学校で資料に出会う、気づく：資源化の実際と今後の活動可能性」『文化資源学』第20号（文化資源学会／2022年）
- ・『京の歴史をつなぐ』村野正景他共著（京都府京都文化博物館／2019年）
- ・「文化遺産の継承そして創造へー参加型考古学を試みる」『過去を伝える、今を遺す：歴史資料、文化遺産、情報資源は誰のものか』、九州史学会・史学会編（山川出版社／2015年）

しみず けん
清水 健

東京国立博物館・主任研究員

- ・「蜷川式胤模造の正倉院宝物」『創立150年記念特集 東京国立博物館の模写・模造一草創期の展示と研究一』（東京国立博物館／2022年）
- ・「正倉院宝物にみる東大寺大仏開眼供養の荘嚴」肥田路美編『古代文学と隣接諸学⑥ 古代寺院の芸術世界』（竹林舎／2019年）
- ・「奈良朝の宮廷生活」奈良国立博物館編『正倉院宝物に学ぶ』2（思文閣出版／2012年）

おちあい り ま
落合 里麻

東北生活文化大学美術学部・講師

- ・「岩手に現存する女乗物—その特徴と形態・デザイン・製作技法の比較」『花巻市博物館研究紀要』第16号（花巻市博物館／2021年）
- ・「江戸時代の駕籠におけるつくりと材料の関係—現存する駕籠の調査結果から—」『民具研究』第154号（日本民具学会／2016年）
- ・「雪景色の箱」（石川県加賀市主催第8回雪のデザイン賞銀賞受賞、木作品／2015年）

かとう あきえ
加藤 明恵

神戸大学大学院人文学研究科・特命助教

- ・「近世中後期在郷町運営における金融と領主財政」(『ヒストリア』295号(大阪歴史学会／2022年))
- ・「幕末期小西新右衛門家の情報収集」飯塚一幸編『近代移行期の酒造業と地域社会』（吉川弘文館／2021年）
- ・「幕末期伊丹郷町の治安維持と町運営」『地域研究いたみ』43号（伊丹市立博物館／2014年）

やました だいすけ
山下 大輔

関西大学博物館・学芸員

- ・「関西大学博物館におけるコロナ過での博物館実習の取り組み」『全博協 研究紀要』第24号（全国大学博物館学講座協議会／2022年）
- ・「関西大学博物館所蔵蓑虫山人由来の土偶」『阡陵』No.83（関西大学博物館／2021年）
- ・「河内国府遺跡出土縄文時代埋葬人骨周辺出土の遺物」『関西大学博物館紀要』第26号（共著、関西大学博物館／2020年）

弥生時代石剣の集古帖への記載

吉田 広 (愛媛大学ミュージアム)

『聆涛閣集古帖』の鋒帖には、現在の考古学で有柄式磨製石剣と分類される資料2点が所収記載されている。朝鮮半島に起源する有柄式磨製石剣は、北部九州を中心に早期の弥生文化流入を端的に示す資料と評価され(下條 1994 等)、記載資料は愛媛松山周辺に集中をみる1例と完品最東例にあたる香川の1例である。ところが、『集古帖』への記載では様相を大きく異にし、そのような差異の生じた経緯背景に考察を巡らせてみたい。

出作村出土石剣(写真1)

宇佐八幡宮辺出土銅戈拓本と同じ開きの左上隅に貼付された別紙に、先端を上に向けて剣状を呈した絵図があり、「予州松山領伊予郡出作村内裏河ヨリ天明四年堀出ス今同邑社ニ納ム」「昔時伊予内親王ノ宮趾ト云」「青緑銅」との注記が添えられている(写真1)。

特異な鐔状の表現により、有柄式磨製石剣とは容易に思えない絵図である。ただし、幕府の具足師であった春田永年の寛政頃までの記述とみられる『観古集』(下垣 2018)に同品の絵図と記述がみられること、愛媛県松前町出作に所在する恵依弥二名神社に近在の宝剣田で江戸時代に出土した有柄式磨製石剣が保管されていることから、『集古帖』の特異な剣形は、この有柄式磨製石剣を描いたもので間違いない。『観古集』には、「恵良八幡エ奉納ス。折節右同村之内ニ亂氣之者有之、色々療用ヲ加ヘ候處、其功無之、或時八幡ノ告ニテ石寶劍ヲ可拜ト也。早速載セ候處、タチマチ快氣ス。依テ人々始テ尊敬シ、多瑞アルト云」との記述があり(清野 1954)、尊崇を集めた神社奉納品・御神宝であったことを窺える。恵依弥二名神社には、「伊豫本宮宝劍加持」の外包をもち、「神宝劍」・「豫(?)本宮」と剣形が捺された御札も伝えられ、この御札の剣形が特徴的な鐔状表現を伴う。つまり、『集古帖』の絵図は御札からの書写の可能性が高い。御札の剣形は長さ7.2cmと小さく、倍以上の16.7cmとしても『集古帖』には小さく、後の貼付に止まったのだろう。

決して広くはない愛媛松前の地元民衆を中心に尊崇を得ていた石剣が、恵依弥二名神社にて神宝劍御札を作製し流布させたことで、その御札を媒体に好古家のネットワークにのり、摂津住吉の聆涛閣へも伝わり、『集古帖』への記載に到ったのである。

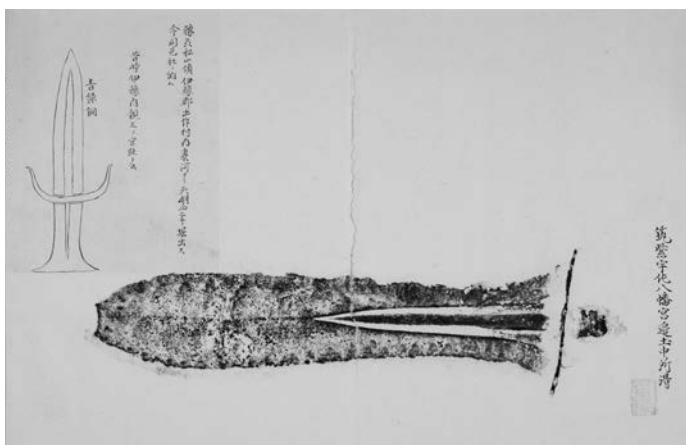


写真1 『集古帖』鋒帖 出作村出土石剣

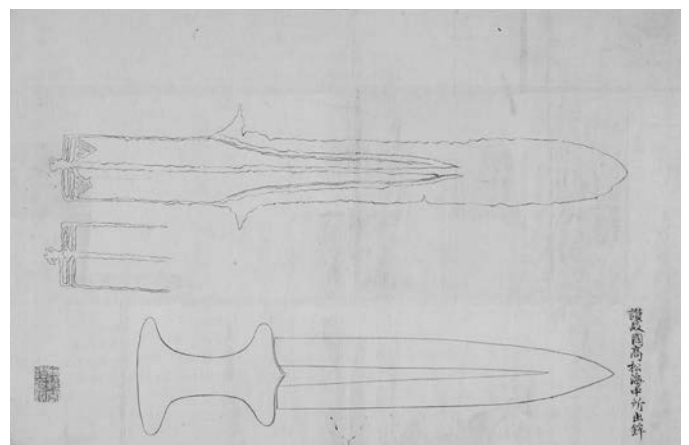


写真2 『集古帖』鋒帖 高松沖海上がり石剣

高松沖海上がり石剣（写真2）

両延八幡社境内出土銅剣最後の1本と同じ開きに、「讃岐国高松海中所出鉞」との注記とともに、先端を右に向けた剣形の絵図が記載されている。シンプルな線描ながら、有柄式磨製石剣の特徴をよくとらえた形状と「高松海中所出」の注記から、現在香川県東かがわ市白鳥神社蔵の有柄式磨製石剣であることが明白である。

『讃岐国名勝図会』第一巻には、高松藩儒者岡井氷室による『寶剣記』を所収して、『集古帖』と異なりかなり写実的な写生図が描かれている。『寶剣記』には享保20年（1735）の石剣発見の様子から高松藩主へ奉獻について詳しく記され、同年に没した第三代高松藩主松平頼豊の治世に対する祥瑞と石剣発見を位置づけている。その後、寛保2年（1742）に、第五代藩主松平頼恭により石剣は白鳥神社へ寄進奉納される。養継嗣として襲った頼恭がアイデンティティを確立していく上で初代藩主松平頼重への尊崇を強め（胡2001等）、頼重が寛文4年（1664）に創建した白鳥神社への石剣寄進が選択されたと考えられる。なお、頼恭自身も、平賀源内の重用や『衆鱗図』の秀麗な図譜編纂等、博物学に傾注した藩主として著名である。

『讃岐国名勝図会』の絵図とは異なる『集古帖』の絵図は、両延八幡社境内出土銅剣と同じく、藤貞幹の『集古図』第十巻の矛上に同巧の図が所収されている。大きさもわずかに差はあるもののほぼ同大。また、老中を務め寛政の改革を主導した白河藩主松平定信による『集古十種』の刀剣二の冊にも、「讃岐國高松海中所出劍図」の題で同様の図が示されている。ただし『集古十種』では劍身中央の鑄は1条のみで、これと同じ図は、武家故実家の伊勢貞春による『武器図説』と安永9年（1780）書写の『本間叢書』に見られる。さらに、江戸末期の寺井吉利による『讃岐集古兵器図考証』では、また大きく異なるタッチの石剣絵図が見られる。

以上、高松海上がり石剣は、藤貞幹の『集古図』から『集古帖』へ、『本間叢書』から『武器図説』そして『集古十種』へ、さらに地元で『讃岐国名勝図会』と『讃岐集古兵器図考証』と、少なくとも4種類の絵図系譜があり、それぞれが現物に即して異なる機会に描写されたことを窺える。

発見後高松藩主松平家への奉獻、その後関連深い白鳥神社への寄進と、当時の公権力とその周辺にこの有柄式磨製石剣はあり続けた。だからこそ、直接の描写や書写そして刊本も半ば公的な記録となり、松平定信による全国的な『集古十種』編纂に際しても採録に到ったのであろう。

まとめ

同じ有柄式磨製石剣として『集古帖』鋒帖に所収されながら、限定的な範囲での庶民的・土俗的信仰に基づいて製作流布した御札が摂津住吉の地までもたらされたことにより記載に到った出作村出土石剣と、高松藩主松平家へ連なる公権力そして公的記録へのアプローチにより初めて記載が可能となった高松海上がり石剣と、経緯は大きな差があったのである。それが端的に絵図の大きさに表れている。寛政期と近世でも早い段階に、その双方の階層のネットワークに連なった摂津住吉の吉田家の集古・好古の活動と成果を、改めて実感させられる。

【参考文献】

- ・胡光「高松藩の藩政改革と修史事業」『香川史学』第28号（香川歴史学会／2001年）
- ・清野謙次『日本考古学・人類学史上巻』（岩波書店／1954年）
- ・下垣仁志「失われた鏡を求めて」『古墳時代銅鏡論考』（同成社／2018年）
- ・下條信行「瀬戸内海の有柄式磨製石剣の諸問題」『「社会科」学研究』第28号（「社会科」学研究会／1994年）

『集古帖』の瓦帖が語る藤貞幹の『古瓦譜』編集過程

村野 正景 (京都府京都文化博物館)

1. 『集古帖』瓦帖と藤貞幹の『古瓦譜』

『集古帖』の瓦帖（以下、本帖。）掲載の瓦 185 点のうち、実に 81 点が藤貞幹の『古瓦譜』（以下、『古瓦譜』）掲載瓦と同一ないし共通点をもつ。では、この特徴に注目することで、本帖の編集時期がいつごろかを明らかにできないだろうか。それによって『古瓦譜』の編集についても、どんな新知見が得られるだろうか。

2. 『古瓦譜』の特徴と編年

多数の瓦を採拓し、それを集成する瓦譜は江戸時代中期以降、盛んに作成され、松平定信や水野忠邦など幕府中枢をになった人物も作成している。そんな中で「圧倒的の代表画譜」（清野 1944:442）と評価されるのが、藤貞幹の『古瓦譜』である。

『古瓦譜』は現在のところ明和4年(1767)の序文をもつものが最も古く、この頃に第一次編集期があった（福永 1975）。大阪府立中之島図書館蔵品（以下、中之島本）がその唯一の現物であり、伊藤善詔の序文を持ち、それが製版されていること、本書にしか掲載されない瓦のあることが、後続の『古瓦譜』と異なる特徴とされる。実は、松浦武四郎が伊藤善詔の序文を持つ『古瓦譜』を吉田家で見たと記しているから、吉田家には第一次編集期のそれがあったことがわかる。

その後『古瓦譜』は安永5年(1776)と記す序文に変わり、製版ではなく筆記となる。掲載される瓦も改訂が加えられる。最晩年のものは寛政6年(1794)頃とされ、東京国立博物館蔵品（以下、東博本。）がその例と考えられている（藪中 2016; 2018）。最初期のものから最晩年まで四半世紀にわたる改訂箇所は多数あるが、ここでは本帖の位置づけを主眼に、中之島本と東博本、そしてその中間にあたる国立国会図書館蔵品（以下、国会図書館本）の3本と比較してみよう。

3. 『集古帖』瓦帖と類似性の高い『古瓦譜』はどれか

これら三本と本帖の比較でまず気づくのは、中之島本と共通する瓦の存在である。他の『古瓦譜』になく中之島本だけに掲載される瓦と同一ないし共通点をもつ瓦が、本帖には合計 14 点もある。他にない特徴が一致するのだから、本帖と中之島本はかなり近い関係にあると言える。

だからといって、中之島本と本帖を同時期の制作物とまで言い切るのは早計のようだ。「右坊」銘瓦を例にみてみよう（図 1）。中之島本の拓影では「坊」字が欠如するが、本帖では「坊」字がある。ただし「坊」の旁は一部欠損する。これと共通する特徴を国会図書館本がもつ。そして最晩年の東博本では「坊」字に欠損のないタイプが採用される。時期を経るにつれ、文字のはっきりしたものに改訂されており、本帖の「右坊」銘は改訂の初段階に近いことがわかる。

そこで他の全ての瓦について『古瓦譜』三本と本帖の類似度を検討してみると、実に 8 割近くと明らかに中之島本と類似度が高い。しかし残り 2 割は異なっており、中之島本そのものというわけではない。一方で、その異なる特徴の拓影は、「右坊」銘でみたように国会図書館本と共通性をもつ。

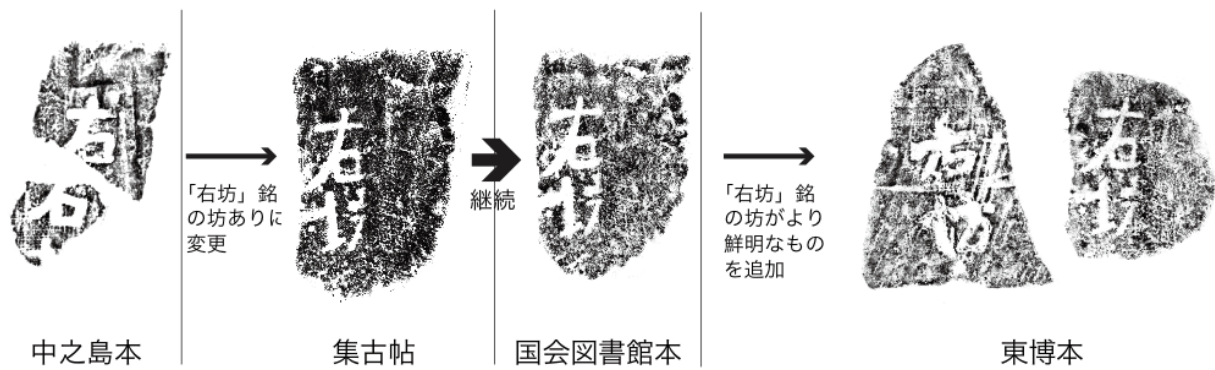


図1 「右坊」銘瓦の編纂過程

したがって以上をまとめると、本帖は中之島本と明らかに高い共通性を持ちつつも、次の時期の国会図書館本とも共通性を持つ点で、まさに両者の中間の時期にあたるものと評価できよう。具体的な編集時期は、明和4年（1767）以降のそれに近い時期に始まったとみられ、安永5年（1776）の序文をもつ『古瓦譜』に先じるものと考えられる。

4. 『古瓦譜』の細かな改訂のプロセス

ところで、中之島本から国会図書館本への橋渡しの時期に本帖が作られたと位置づけると、より細かな改訂作業の様子も見出さう。例えば「神祇官」銘瓦を仔細に見ると、中之島本では「祇」の偏が重複して拓影に現れていたが、本帖でそれは削除され、その後ずっと本帖と同じタイプが継承されていく。一方で「大極■」銘瓦では、中之島本にある文字の形をなさない■部分を本帖も引き継ぐものの、国会図書館本では削除し、それが後に続いていく。不明な箇所を削除していくという行為は、「右坊」銘瓦の文字を明確なものへ改訂していく行為と根を同じくする。しかも削除の行為は、元になったものに対する自らの読み取りや解釈を考え直していることを示す。かつて捏造をエスカレートさせたかのように描かれた姿とは逆である。このように本帖は『古瓦譜』改訂過程の解明に重要な知見をもたらす。

5. 本帖の存在意義

以上、本帖はその編集時期を『古瓦譜』から考察しうると同時に、『古瓦譜』の編年自体に細かな情報を提供しう。それ自体の意義はもちろんのこと、それだけでなく、近世の考古学史に関する豊かな知見を与えてくれる点に大きな存在意義がある。先行研究にあるような現代的モラルから捏造の有無を議論する位相ではなく、近世の人々が何を資料と捉え、どう資料化し、提示しようとしたかといった考古学的営みの発生を知りうる素材として向き合うことが肝要であろう。

本研究の一部は、国立歴史民俗博物館令和4年度共同利用型共同研究「藤貞幹の古瓦譜の制作過程に関する実験考古学的研究」の成果を含む。

【参考文献】

- ・ 福永信雄「大阪府立図書館蔵の『古瓦譜』について」『東大阪市遺跡保存調査会 調査会ニュース』No.1（東大阪市遺跡保存調査会／1975年）
- ・ 藪中五百樹「藤原貞幹『古瓦譜』『仏利古瓦譜』（臨山閣文庫尚古齋藤本）の検討（上）（下）」『帝塚山大学考古学研究所研究報告』XVIII・XX（帝塚山大学考古学研究所／2016・2018年）

近世好古図録に描かれた寺社宝物

清水 健 (東京国立博物館)

はじめに——近世好古図録をひらく

幕末から明治初期にかけて編纂されたと考えられる『れいとうかくしゅう ちちゅう 聆涛閣集古帖』は、全46帖と40枚の絵図等から成る巨大な好古図録である。およそ2,400件の図を収載し、それらは現物から直接採った拓本、拓本を模写したもの、現物を模写したもの、模写を切り貼りしたもの、模写の模写など多岐にわたり、彩色されたものを多く含むなど、近世好古図録中でも随一の質と量を誇っている。これらは、吉田道可よしだどうか (1734～1802)、吉田肅しよく (1768～1832)、吉田敏びん (1802～1869) の3代・100年近くにわたって収集された資料を集成したもので、国学の勃興などを受けて隆盛した考古・考証学(古い時代の事物を考察する学問)の江戸時代における展開と軌を一にしている点が興味深く、また極めて重要といえる。「灘の酒」の生産地であり、流通の拠点の一つであった摂津・住吉の酒造家として栄えた吉田家には、多くの人やものが集まり、好古趣味を半ば家業のように受け継いで大成させたのがこの『聆涛閣集古帖』であり、尽きせぬ魅力を秘めている。

今回は、この「知の玉手箱」をひらき、そこに描かれた寺社宝物を題材として、近世好古図録の世界をのぞいてみたい。

1. 正倉院の開封と宝物図の作成

江戸時代の寺社宝物をめぐる動向で、重要な事象に正倉院宝庫の開封とそれに伴って行われた正倉院宝物の模写が挙げられる。正倉院宝庫は、長年勅封ちよくふう(天皇による封)並びに綱封こうふう(僧綱による封)とされ、点検・修理などの機会を除くと扉は固く閉ざされ、内部に納められた宝物を拝観する機会もなかった。宝庫が開かれたのは江戸時代を通じて、慶長8年(1603)、元禄6年(1693)、天保4～7年(1833～36)の3度のみであるが、このうち元禄期と天保期に作られた宝物図が現在も写し継がれて伝わっている。元禄期の模写は、描写の精度は高くはないが、広範に流布し、幕末に至るまで人々の好奇心を満たす存在であった。一方、天保期の模写は描写の精度がかなり高く、宝物によっては様々な面を描いているのも特徴で、宝物自体への興味の高まりを思わせる。

なお、『聆涛閣集古帖』には、双方からの模写が含まれており、また穂井田忠友ほいただとも(1791～1847)の『かん ことづじょう 観古雑帖』からの引用も含まれている点は、成立過程を考える上でも興味深い問題を孕んでいる。

2. 開帳の隆盛と宝物図の作成

江戸時代には、交通の整備・発達や都市の繁栄などを背景に、各地で寺社による開帳(居開帳)や出開帳が行われた。法隆寺(奈良県)では、修造費用を調達するため、元禄7年(1694)に江戸・回向院えこういんで開帳を行っており、大成功を収めている。この折の宝物図は存在が知られていないが、寛政7年(1795)に京都・法林寺で行われた出開帳に際しては、田中訥言たなかとつげん(1767～1823)による『法隆寺宝物図巻』(奈良・法隆寺蔵)が残り、また、天保13年(1842)に再び江戸・回向院で行われた出開帳に際しては、歌川国直うたがわくになお(1793～1854)による『御宝物図絵』及び『御宝物図絵追編』が刊行されたほか、狩野晴川院かのうせいせんいん(1796～1846)一門による模写も行われている。

また清涼寺(京都府)では、元禄13年(1700)に江戸・護国寺にて本尊・釈迦如来立像しゃかによらいりゅうぞうの出開帳を行っ

た後、頻繁に江戸での出開帳を行っており、江戸時代を通じて10回を数える。あるいは善光寺（長野県）も度々出開帳を行ったことが知られており、元禄5年(1692)に江戸・回向院で行われたのを皮切りに京・大坂でも行われ、江戸では後年7年に一度の周期で行われている。

他方、尾張・名古屋も徳川家の城下町として繁栄し、寺社の開帳が盛んに行われた。尾張藩士のこうりきえんこうあんたねのぶ高力猿猴庵種信（1756～1831）は、18世紀末から19世紀にかけて、これらを記録した絵入り本を刊行しており、街の賑わいとともこさつに宝物類も描写されている点は貴重である。

ところで、正倉院宝庫の開封や古刹の江戸出開帳の行われた元禄期には、こうけいしょうにん公慶上人（1648～1705）によって成し遂げられた東大寺大仏の再興・開眼供養かいげんくようが行われているのも興味深い。室町時代末にまつながひさひで松永久秀（1510～1577）の兵火によって炎上した東大寺大仏は、長らく仮補修のような状態であったが、公慶の勧進かんじんによって再興され、元禄5年（1692）に開眼供養が行われた。この折には全国から参詣者が集まり、宝物の開帳なども行われている。また、公慶は、元禄8・9年（1695・96）には5代將軍とくがわつなよし・徳川綱吉（1646～1709）やその生母で寺社の修造に熱心であった桂昌院けいしょういん（1627～1705）に謁見し、鎌倉時代初期に大仏の再建に尽力した重源上人ちゅうげん（1121～1206）ゆかりの宝物を披露し、多くの援助を受けている。

以上のように、宝物図の作成の前段階として、元禄期を中心とする時期に開帳の気運が盛り上がり、人々の寺社宝物への関心が高まった可能性を指摘しておきたい。

3. 『集古十種』の編纂とその周辺

近世好古図録の金字塔ともいえるのが、老中も務めた陸奥白河藩主・まつだいらさだのぶ松平定信（1759～1829）が編纂し、寛政12年（1800）頃に成立した『集古十種』85巻である。定信は編纂に当たって、寛政4年（1792）に幕命として儒者のしばのりつざん柴野栗山（1736～1807）や国学者のやしろうかた屋代弘賢（1758～1841）、絵師のすみよしひろゆき住吉広行（1755～1811）に京都・奈良の寺社の宝物を調査させており、明治5年（1872）に明治新政府が行ったいわゆる壬申検査みづのただなかを遡る総合的な調査として注目される。また、『集古十種』の編纂に大きく関係しているたにぶんちよう谷文晁（1763～1840）も、寛政8年（1796）に奈良を巡検して絵日記を残しており、調査に基づく実証的な態度が一部に含まれていたことは特筆される。『集古十種』には、他の図書からの引用なども含まれるが、法量や材質、所在地などの基礎データや色彩（色注）などの情報も含んでおり、総合図録の制作を企図したことが伝わってくる。なお、姉妹編として、絵巻を中心とする古画から抜き描きした『古画類聚』も制作されていたが、こちらは未刊行のまま明治を迎え、その後一部が公刊されたが、全容が示されたのは平成になってからであった。

一方、紀州藩付家老のつげがろう水野忠央（1814～65）の編んだ『丹鶴図譜』も注目される。調度部と紋部から成り、調度部には元禄17年（1704）の跋文たんかくずふがあって、平安時代成立の『類聚雜要抄』からの抜粋が多いが、紋部には正倉院宝物の天保期の模写なども含まれており、それ以降の成立とみられる。

ちなみに紀州藩周辺では、文事が盛んで、水野忠央の仕えた10代藩主・徳川治宝とくがわはるとみ（1771～1852）は、『紀伊続風土記』の編纂や春日社秘蔵の『春日権現験記絵巻』かすがごんげんげんきえまき（現・宮内庁三の丸尚蔵館所蔵）の模本制作を行い、楽器の収集でも知られている（その多くは現在国立歴史民俗博物館が所蔵）。また、5代藩主から8代將軍となった徳川吉宗とくがわよしむね（1684～1751）の後を承けた6代藩主徳川宗直とくがわむねなお（1682～1757）は、『聆涛閣集古帖』にも引用される『熊野新宮神宝絵図』くまのしんぐうしんぼうえずを享保19年（1734）に作らせている。そもそも紀州藩出身の吉宗も『春日権現験記絵巻』を江戸に取り寄せて親覧しており、その子の田安宗武たやすむねたけ（1715～71）は模本を制作していて、最初の田安本は失われたものの、二度目の模写はその子の松平定信が後半を引き継ぎ（ただし後半は勸修寺家伝来模本の模写）、白河から転封された桑名松平家を経て、現

在春日大社に蔵されている。定信の好古志向は、吉宗や紀州藩の好学の系譜に連なるものといえるのではなかろうか。

むすびに——近世好古図録をとじる

元禄期には、徳川綱吉の生母・桂昌院によって寺社の修造が盛んに行われ、またこの時期寺社の出開帳なども行われるようになった。寺社の宝物への関心の高まりから、これらの模写（宝物図）が作成されるに至り、それが18世紀後半からの国学の興隆などを受けて、考証・分類・整理などが行われるようになり、近世好古図録へと繋がっていったのであろう。

その後、明治を迎え、近代的な文化財調査が行われ、写真が流布するようになると、好古図録は役割を終えたと考えられる。その役割は、近年研究の俎上に上がることの多くなった絵葉書や写真図録などに引き継がれていったのであろう。

網代輿を「作る」視点で考える

落合 里麻 (東北生活文化大学)

輿は乗用具の一つで、奈良時代から明治時代初期までの長い期間、天皇家を中心に用いられた。網代輿は輿の一種で、側面や屋根といった広い面を網代で仕上げるため「網代輿」と呼ばれる。

企画展示「いにしえが好き!!—近世好古図録の文化誌—」で展示した聖護院蔵「御車輿」(網代輿)木部構造模型は、『聆涛閣集古帖』「乗輿一」収載の「當時 御車輿圖」が基となっている。研究開始当初は書かれた内容の解読や関連資料の調査をしていたが、この図と同じ様式の輿が京都御所と聖護院に1基ずつ現存することがわかった。原物の網代輿を前にしてものづくりの視点で研究できることは予想外だったが幸運である。2019年の春に2度聖護院を訪れて「御車輿」(網代輿)の調査を行い、手描きの実測メモからCADを使って実測図を完成させた。そして次の段階として、「実際に作ることで、木部のつくりやデザイン・設計のポイントがわかり、見る人の理解にも繋がるのでは」という発想に至った。網代輿のように大きく、存在感のある乗用具となれば、歴史的背景や使用方法に人々の関心が行くのが自然である。しかし、それが完成するまでには多くのスペシャリストの存在があり、数々の工程を経て完成に至ったはずだ。当時の資料は乏しいが、原物から情報を得ることは可能である。制作過程では予想を上回る難しさがあり、一方で杞憂だったこともある。網代輿のデザインの特徴、細部のつくり、当時制作に関わった人々が何を大切に考え、どのような工夫をしたのかが、少しずつ見えてきた。

1. 網代輿のつくりは大きく3つの部分に分けて考える

網代輿は図1のように、下部「床下」、中央部「屋形」、上部「屋根」に分けて考えると、つくりを理解しやすい。各部の名称は社寺建築に倣い、筆者がつけたものだ。

2. 使用された木材

原物の網代輿にはおそらく針葉樹材が使用されている。一方、縮尺5分の1の模型の場合は体積が原物の125分の1となるため、針葉樹材では強度が足りず、細い部材は折れてしまう。そのため模型には広葉樹の桜材を使うことにした。桜材は散孔材で、導管が年輪上に偏らず均一に通るため、細い材でも潰れる心配が少なく、部材を作りやすい。

3. 構造材の見極めと模型用の設計図

模型制作では、初めに構造材を見極める必要があった。輿、脚、根太、柱材、それを繋ぐ横方向の材、妻板、棟桁、側桁、屋根を形作る垂木と棧、等。判断に苦慮した部材は開口部両側に位置する方立だ。板材だが厚みがあり、前面・背面に向いて配置されることから、側面の歪みを抑える構造材と判断した。部材の接合は外観

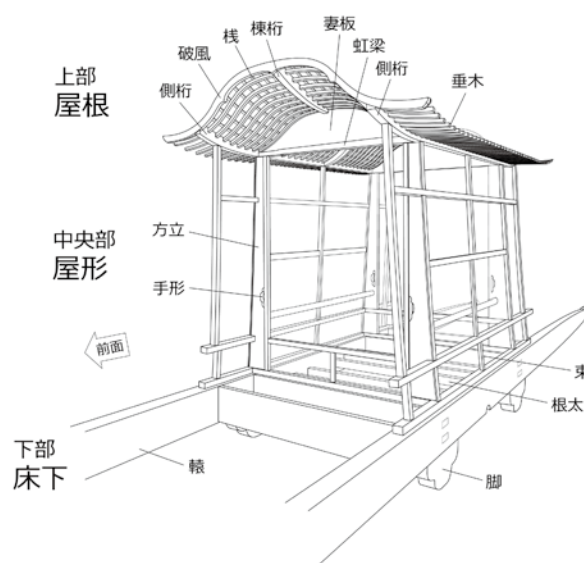


図1 聖護院蔵「御車輿」木部構造の立体図

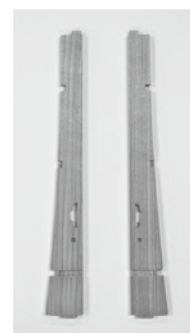


図2 方立の部材

から見えないため、新たに模型用の設計図を描く必要があった。部材一つ一つの意味と役割を考え、制作手順、接合方法、自分の技術で制作可能かどうか、強度を持てるかどうかを検討して描いた。中には原物に倣うのではなく、模型の強度を優先して設計を変更した箇所や部材もある。

4. 木工の道具

基本的な木工の道具は江戸時代からあまり変化していない。鋸、鑿、鉋、定規、スコヤ、罫引等を使い、小さな枿や棟桁と側桁の溝加工では、小道具のみや五厘の彫刻刀が活躍した。大は小を兼ねないため、使い分けが必須である。0.1mm も間違えないこと、刃物をよく研ぐことを心掛けた。

5. レーザー加工機を使って型を作る

曲線の部材の正確な墨付けにはアクリル板の型を使用した。CAD データをレーザー加工機に取り込んでアクリル板をカットし、屋根の垂木や棧、方立の手形の墨付け用の型の他、角度のガイド等も制作した。想像の域ではあるが、当時は手作業で型や定規を作り、墨付けに活用していたのではないか。



図3 アクリル板の型を使った妻板の墨付け

6. 制作工程と制作を通して見えてきたこと

模型は下部「床下」、中央部「屋形」、上部「屋根」の順で、下から組み上げるように制作した。

床下では、轆とその間を繋ぐ2本の太い部材の接合が重要で、通しの二枚枿で強固に接合される。

轆の上の屋形は、縦方向が緩い曲線で構成される。これはデザインを優先した形で、構造上のメリットは感じられない。このような曲線は網代輿のほか、同時代の板輿や塗輿にも用いられ、この種の輿の基本的なデザインの要素と考えられる。曲線は円弧ではなく、上部と下部で曲率が異なる。

屋形の制作では、仮組みして確認し、ばらして微調整の繰り返しであった。屋形は床下に比べて部材が細く、さらに角度をつけて接合するため、基準を設定しながら慎重に組み上げる必要がある。

屋根の形態は前後に膨らみのある唐破風状で、社寺建築に倣ったことが見て取れる。垂木（妻側）39本の上に棧（平側）24本を直交させて特徴的な3次曲面が作られる。3次曲面ゆえにこの数の垂木と棧が必要で、同時代の駕籠に比べて圧倒的に本数が多い。中央の棟桁と梁、左右の側桁、正面・背面の唐破風は、屋根の形態を作る上で核となる構造材である。原物では、おそらく棟桁・側桁の側面に垂木が枿組みで接合するが、縮尺5分の1の模型では原物に倣うことが難しく、形態を保つことを優先する方法で制作した。



図4 屋根の核となる構造材の仮組み

7. おわりに

江戸時代に制作された網代輿は100%手作業によるものである。一方、この度の模型制作では、形態を図面通りに正確に作り上げることを優先し、地道な手作業からレーザー加工機の使用まで、その工程に見合った技術を取り入れて制作した。模型制作によって原物の網代輿を研究することが目的であったが、結果的には模型を作ることに研究でもあった。

『集古十種』編纂をめぐる吉田道可と松平定信の交流

加藤 明恵 (神戸大学大学院)

はじめに

吉田家 18 代吉田道可と白河藩主松平定信との文化的交流や『集古十種』編纂をめぐる接点は、すでに黒田辰男によって指摘されていたが、史料を用いた具体的な叙述がなされたわけではなかった (黒田 1969)。また、その後の『集古十種』編纂に関する研究においても、吉田道可の存在は大きく取り上げられてはこなかった (福島県立博物館 2000)。しかし、神戸市立博物館所蔵「住吉良運商社文書」、大阪歴史博物館所蔵「摂津国菟原郡住吉村文書」等の調査を経て、吉田道可が『集古十種』編纂のための古器物等調査に重要な役割を果たしたことが明らかとなった (加藤 2022)。京坂のみならず全国的な好古家ネットワークや、好古図譜編纂の資料学的検討をより深めていく上でも、吉田道可の『集古十種』編纂をめぐる文化的活動の具体像を解明することが必要であると言える。

1. 画僧白雲の古器物調査への協力

白河藩の画僧白雲は、寛政 11 年・12 年 (1799・1800) の二度にわたり、『集古十種』編纂のため、畿内・西国で調査を実施した。2 月 23 日付 (寛政 11 年と推測される) 白河藩士菅谷新平より吉田助左衛門 (道可) 宛ての書状 (住吉良運商社文書) から、古器物調査にあたり、白河藩が道可に対して期待していた役割をうかがうことができる。この書状では、大和国釜口山長岳寺から吉野・初瀬・紀州高野山にかけての道可の旅行に、白河藩から派遣する白雲ほか 2 人を同行させることを依頼している。また、道可は路用金立て替えも期待されていることが分かる。菅谷は道可に対し、白雲らの畿内到着に合わせた旅程調整も依頼していることから、紀州・和州における円滑な調査のためには道可の人脈が不可欠であったと言えよう。寛政 11 年の第一次西遊では、高野山・紀州方面の調査が行われており、白雲による「拓本帳」には釜口普賢院蔵の古鏡・古瓦・古銭を収載していることから (加藤 1998)、道可が同行した調査による成果であることが推測される。

1 月 5 日付 (寛政 12 年と推測) の白雲より吉田道可宛ての書状 (摂津国菟原郡住吉村文書) から、菅谷からの依頼どおり、道可は白雲らの古器物調査に協力したことがうかがえる。白雲は去る 12 月 6 日に無事江戸に到着したことを道可に知らせ、道可による「古物品々」の献上について松平定信の御前で沙汰があったことに加え、白雲自身も「上ノ思召」により拝領品等があったことは道可の尽力のお陰であると謝意を伝えている。これは寛政 11 年 12 月に江戸で催された、白雲らが収集した資料の展覧を受けてのことだと考えられる (佐川 1998)。前述の「拓本帳」からも白雲が吉田家において古瓦等を調査したことがわかるが、この他にも吉田家において模写した資料として、王世貞「飲中八仙歌」が定信の目にとまっている。

吉田道可は白雲等の現地での古器物調査を円滑にするための支援を行うことに加え、自らが所蔵する古器物を調査に供していた。

2. 古器物情報の提供

吉田道可が有する豊富な古器物の写しや拓本、資料情報やそれを得るための文化的ネットワークは、『聆濤閣集古帖』の編纂だけでなく、白雲一行の調査協力を始め、『集古十種』編纂のためにも活用された。

12月18日付（寛政11年と推定）の白河藩野田郡蔵・田内蔵田から吉田道可宛ての書状（住吉良運商社文書）では、道可に対して古器物情報を問い合わせている。問い合わせ内容はすべて道可が白河藩に提供した写しに関するもので、①摂州鷲尾家蔵源義経朝臣鞆図に関する不明点、②木曾義仲願文の所蔵者、③兵庫福海寺の額の写しに「道有」「天山」の印が二箇所記されていること、の3点である。この書状では他にも、「十三経墨本」の借用を道可に依頼している。特に①の源義経鞆図に関しては、鞆の「空」と「穂」とが分離しているように見える点が非常に珍しいと評価されており、別紙で詳しく問い合わせが記されている。この鞆図は『集古十種』兵器編に掲載されており、古器物情報の照会・照合を経ていたことがうかがえる。また、『集古十種』掲載の武具に関して、百姓・町人の家に伝来した武具も掲載していること、源義家・源頼朝・源義経・楠正成に関わる武具が多いことが指摘されている（岩橋2020）。鞆図自体の希少さに加え、源義経の鞆という由緒が詳細な照会に至る要因の一つとなったことが考えられる。なお、①源義経鞆図は『聆濤閣集古帖 弓矢』にも掲載されている。

このような吉田道可から白河藩に対する古器物の写しの提供は、他の書状でも確認することができる。道可は畿内における古器物情報・文化的ネットワークを豊富に有し、白河藩に提供していたと言える。また、白河藩は、道可個人が持つ古器物情報に加え、「伝手」を頼ることでより広範な調査を試みていた。『聆濤閣集古帖』の編纂を可能にする道可の文化的ネットワークは、『集古十種』編纂を果たすためにも有益であり、畿内における古器物情報収集において道可が担った役割は小さくなく、と言えよう。

おわりに

松平定信の『集古十種編纂』にあたっては、白雲一行による和州・紀州における調査への同行を始め、古器物情報の提供など、吉田道可による調査協力が重要な意味を持ったことが明らかになった。今後の課題は、吉田道可が有していた、白河藩へもつながる文化的ネットワーク全体の具体像を一つずつ明らかにしていくことである。

【参考文献】

- ・岩橋清美「『集古十種』にみる松平定信の古物認識」『書物・出版と社会変容』24号（「書物・出版と社会変容」研究会／2020年）
- ・黒田辰男「聆濤閣縁起」『陶説』197号（日本陶磁協会／1969年）
- ・加藤純子「白雲収集による『集古十種』採訪資料について」白河市歴史民俗資料館編『定信と画僧白雲—集古十種の旅と風景』（白河市歴史民俗資料館／1998年）
- ・加藤明恵「吉田道可による松平定信『集古十種』編纂事業への支援と文化的交流」内田雅夫編『神戸住吉の豪商吉田家【論文篇】』（住吉歴史資料館／2022年）
- ・佐川庄司「画僧白雲伝記点描—展示概説にかえて—」（前掲『定信と画僧白雲』1998年）
- ・福島県立博物館編『集古十種—あるく・うつす・あつめる 松平定信の古文化財調査』（福島県立博物館／2000年）

『聆涛閣集古帖』と「本山コレクション」

山下 大輔 (関西大学博物館)

はじめに

「本山コレクション」とは、大阪毎日新聞社第五代社長本山彦一が蒐集した考古学資料である。本山彦一の逝去後、このコレクションを整理・調査した末永雅雄が関西大学の教授に就任したことを契機に、昭和28年(1953)から順次関西大学へ移管されることとなり、現在、関西大学博物館が所蔵している。この約2万点に及ぶ資料には、日本国内のみならず、満州から中国、朝鮮半島、南米ペルーまで世界各地の資料が含まれており、平成23年(2011)には国の登録有形文化財に登録された。

当コレクションには、本山彦一自身が発掘調査を行い蒐集した資料の他、各地の蒐集家から寄贈を受けた資料、そして散逸の危機にあった神田孝平旧蔵資料を買い戻すことで所蔵することとなった資料などが含まれている。残念ながら2万点の資料の中には、出土地などその来歴が不明なものも含まれている。そのような来歴不明な資料に関しても、これまでの調査・研究によって、本山の手元に至るまでの過程が明らかになったものも多く存在する。ここでは、特に近年の吉田家『聆涛閣集古帖』に関する研究によって明らかとなった、本山コレクションとの関係性や当時の好古家たちのネットワークについて触れてみたい。

1. 史料から読み解く本山コレクションの来歴

先に触れたように、「本山コレクション」には神田孝平旧蔵資料が含まれている。神田は幕末から明治はじめにかけての洋学者であり、啓蒙思想家、高級官僚であったが、多忙な政務の傍ら、各地の考古学資料を蒐集していた。その死後、散逸の危機にあった神田孝平旧蔵資料を本山が一括して流出先から買い戻しており、神田の著書『NOTES ON ANCIENT STONE IMPLEMENTS, &c., OF JAPAN』(日本書名『日本大古石器考』)等に掲載されている資料が現在「本山コレクション」として関西大学博物館に所蔵されていることが判明している。さらに、神田孝平旧蔵資料の中には、木村兼葎堂(1736～1802)や、柏木貨一郎(1841～1898)、蓑虫山人(1836～1900)が所蔵していた資料が含まれており、本山の手元に至るまでに多くの蒐集家関わっていたことがうかがえる。

このように、資料の来歴については、蒐集家の著作や江戸時代以降の史料に掲載されている絵図、スケッチなどから同定が可能となる場合がある。発掘調査によって得られた資料で、出土地や蒐集の経緯が明らかな場合以外は、史料に残された絵図などが大きな手掛かりとなる。『聆涛閣集古帖』にみえる絵図も、「本山コレクション」の来歴とコレクション形成の過程を知る上で重要な情報を提供することとなった。

2. 『聆涛閣集古帖』の中の「本山コレクション」

今回の展覧会「いにしえが、好きっ！ 一近世好古図録の文化誌一」には、「本山コレクション」に含まれる資料8点を出品している。そのうち三鈷杵以外は神田の『NOTES ON ANCIENT STONE IMPLEMENTS, &c., OF JAPAN』や大場磐雄の『楽石雑筆』等に図が掲載されており、本山の手元に至る以前に、神田が所蔵していた資料であることが分かっている。また、この中の鋏形石と馬形埴輪は木村兼葎堂旧蔵資料であり、琴柱形石製品は松浦武四郎(1818～1888)の『己卯記行』に吉田

家所蔵資料としてその図がみえる。さらに前述の木村兼葭堂旧蔵の馬形埴輪については、『己卯記行』の中に「土馬の事を聞しかば、是は神田県令にかし置しが、未だ帰されざりし」という記述がみられることから、吉田家から当時兵庫県令であった神田に貸し出されたが、松浦が訪問した段階では吉田家に返却されておらず、神田の手元にあったことがうかがえる。つまり、この馬形埴輪に関しては、木村兼葭堂から吉田家へ、そこから神田孝平の手元に渡り、その後本山彦一が所蔵するに至るという道筋を読み解くことができるのである（徳田 2019）。

三鈷杵については、本山彦一所蔵資料の目録である『本山考古室目録』にもそれと断定できる形での登録がなく、神田孝平の著作等にもその図をみることができない。これまでその来歴が不明であったが、『聆涛閣集古帖』に本資料と思われる図が掲載されており、来歴についての大きな手掛かりを得ることができた。さらに、今回の展覧会に伴う調査・研究により、本資料とほぼ同一と考えられる三鈷杵が、寺井吉利（1787～1854）の『讃岐集古兵器図考証』にみることができ（本展図録参照）。本書には「中村春野所蔵」とあることから、本資料は一時期讃岐の中村春野（1773～1837）のもとにあった可能性が指摘されている。

おわりに

これまで「本山コレクション」が関西大学博物館に所蔵されるまでに、その一部は本山彦一以外にも木村兼葭堂や神田孝平など複数の蒐集家の手を経ていることが知られていた。このような近世から近代にかけての考古資料についての知のネットワークや資料のバトンリレーに、吉田家も深く関わっていたことが明らかになった。当コレクションについては、これまでも記録として残されている絵図やスケッチなどから資料を同定する作業を行い、その来歴とコレクションの形成過程を明らかにする作業を実践してきた。今後も同様の作業を継続し、コレクション形成の背景となった文化史的側面の実態についても追及できればと考えている。

【参考文献】

- ・大場磐雄『楽石雑筆（中）』大場磐雄著作集 第7巻（雄山閣／1976年）
- ・関西大学博物館『平成23年度関西大学博物館企画展図録 関西大学博物館蔵 本山コレクションの由来』（関西大学博物館／2011年）
- ・神田孝平『NOTES ON ANCIENT STONE IMPLEMENTS, &c., OF JAPAN』（1884年）
- ・関西大学博物館『博物館資料図録』（関西大学博物館／1998年）
- ・関西大学博物館『関西大学博物館蔵 本山彦一蒐集資料目録』（関西大学博物館／2010年）
- ・佐藤貞夫編『己卯記行』（松浦武四郎記念館／2015年）
- ・末永雅雄『本山考古室目録』（岡書院／1934年）
- ・徳田誠志「関西大学博物館所蔵 旧木村兼葭堂所蔵の鍬形石一奈良県島の山古墳の出土品一」『関西大学博物館紀要』第3号（関西大学博物館／1997年）
- ・徳田誠志「神田孝平から本山彦一へのバトンリレー—本山コレクションの来歴—」『阡陵』No.66（関西大学博物館／2013年）
- ・徳田誠志「関西大学博物館所蔵 木村兼葭堂旧蔵の馬形埴輪について」『阡陵』No.79（関西大学博物館／2019年）

ご案内

【展示のご案内】

- 第3展示室特集展示「中世公家の〈公務〉と生活－広橋家記録の世界－」
会 期：開催中～2023年5月7日(日)
- 第4展示室特集展示「来訪神、姿とかたち－福の神も疫神も異界から－」
会 期：開催中～2023年5月14日(日)
- 企画展示「いにしえが、好きっ！－近世好古図録の文化誌－」
会 期：開催中～2023年5月7日(日)

【催事のご案内】

第116回歴博フォーラム「中世公家の〈公務〉と生活－広橋家記録の世界－」

日 時：2023年4月15日(土)13:00～16:30

場 所：国立歴史民俗博物館講堂

申 込：要事前申込

その他：聴講無料

第40回歴博映画の会「大和の古代寺院の年頭儀礼と鬼追い行事、その伝承」

日 時：2023年5月13日(土)13:30～15:30

場 所：国立歴史民俗博物館講堂

申 込：要事前申込

その他：聴講無料

※新型コロナウイルス感染症拡大状況により、展示・各種催事が変更・中止となることがあります。
最新の情報は当館ウェブサイト等でご確認ください。

【歴博の情報発信】

国立歴史民俗博物館の企画展示・特集展示・フォーラム・講演会等の情報は、ウェブサイト・Twitter・YouTube・ニューズレター（メルマガ）でもご案内しています。

- ウェブサイト <https://www.rekihaku.ac.jp/>
- Twitter [@rekihaku](https://twitter.com/rekihaku)
- YouTube <https://www.youtube.com/@NMJH>
- ニューズレター ウェブサイトのトップ画面に「れきはくニューズレター」のアイコンがあり、そこから登録画面に進めます。

第115回歴博フォーラム

「いにしえの「玉手箱」、近世好古図録をひらく」

発 行 日 2023年4月1日

編集・発行 国立歴史民俗博物館

〒285-8502 千葉県佐倉市城内町117

Tel. 043-486-0123 (代)



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立歴史民俗博物館
National Museum of Japanese History

ISBN 978-4-909293-17-6



9784909293176